

P10-81

武蔵野赤十字病院における院内急変コールの状況とCPA症例の検討：第1報

武蔵野赤十字病院 救命救急センター集中治療室¹⁾、
武蔵野赤十字病院 救命救急科²⁾

○小林 圭子¹⁾、井手上 龍児¹⁾、安田 英人²⁾

【はじめに】院外心停止の予後は改善しているが、院内心停止に関しては退院時生存率の改善はみられていない。当院では“急変”の第一発見者が救命救急センターのホットラインシステムを利用し、直接救命科医師、看護師が現場に駆けつけ初期対応を行うRapid Response System (RRS)を導入している。しかしこれらのコール基準、発生場所や内容は明らかでない。

【目的】当院のRRSコールの現状を把握する

【倫理的配慮】看護倫理委員会の承認を得て行った

【方法】2008年1月から2010年4月までのRRSコールを対象とし、院内救急コール記録用紙と診療録より要請理由、発生場所、発生時刻、患者特性を収集した

【結果】RRSコールは137例で、男性77名(56.2%)、女性60名(43.8%)、平均年齢は68.1歳。要請理由は心肺停止(Cardio Pulmonary Arrest; CPA)51例(37.2%)、意識障害27例(19.7%)、呼吸不全20例(14.6%)、ショック12例(8.8%)、その他27例(19.7%)であった。発生場所はユニット系で21例、一般病棟で59例、ER・初療室、心カテーテル室など外来系治療室で24例、外来は33例であった。発生時刻は日勤帯に最も多く63例(46.0%)、深夜帯43例(31.4%)、準夜帯27例(19.7%)であった(4例は情報収集不可)。深夜帯・準夜帯における要請理由はCPAがそれぞれ26例(59.1%)、13例(48.1%)と最も多かった。日勤帯では窒息、失神、痙攣などその他が19例(30.6%)と最も多く、意識障害15例(24.2%)がそれに続き、CPAは11例(17.7%)であった。ACLS実施が45例と最も多く、気管挿管は17例であった。5例はPCPS導入を要した。退院または転院した症例は77例(56.2%)、院内死亡は57例(41.6%)であった。

【考察】夜勤帯におけるCPA発生率の高さは、患者変化の発見・早期介入の遅延による可能性が推測され、予防しえたい予期しないCPAの存在が考えられた。重篤な患者の割合が高く、必要とされる処置も高度で、RRSの果たしている役割は大きい。

P10-83

看護専門学校1年次の臨地実習における看護技術習得の現状

和歌山赤十字看護専門学校

○畑下 珠世、谷垣内 郁余、高岸 壽美

厚生労働省から出された「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書で、「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」が示された。当校においては、学内での演習で、3年間で習得すべき看護技術を一覧にした「学内演習—技術確認・チェック表」と各看護技術の「チェックリスト」を用いて、専任教師が分担し看護技術の指導にあっている。また、1年次から3年次の臨地実習において、各看護学領域で看護技術が習得できるように「看護技術経験録」を使用している。基礎看護学領域においては、1年次に3回の病棟での臨地実習を実施している。1年次後期に行われる基礎看護学2期実習では、学生の看護技術の習得状況を把握できるように、「基礎看護学2期実習—看護技術経験録」を使用している。看護技術の項目と内容をあげ、見学した看護技術には自分で印をつけ、実施できた看護技術には看護師からサインをもらっている。毎年、実習終了後に「基礎看護学2期実習—看護技術経験録」を回収し、各看護技術の習得状況を「実施」「見学」「未経験」に分類し、集計している。過去5年間(平成17年度~21年度)の結果から、毎年ほぼ90%以上の学生が実施できた看護技術には、「ベッドメイキング」「全身清拭」「患者の移送」「体温脈拍呼吸測定」があった。一方、見学と未経験の合計が毎年ほぼ50%以上である看護技術には、「口腔ケア」「自然排便・自然排便」「安全と感染予防」「電法」「滅菌物の取り扱い」があった。これらの現状について、報告する。

P10-82

武蔵野赤十字病院における院内急変コールの状況とCPA症例の検討：第2報

武蔵野赤十字病院 救命救急センター集中治療室¹⁾、
武蔵野赤十字病院 救命救急科²⁾

○井手上 龍児¹⁾、小林 圭子¹⁾、安田 英人²⁾

【はじめに】院外心停止の予後は改善しているが、院内心停止に関しては、退院時生存率の改善はみられていない。近年Rapid Response System (RRS)が考案され、Medical Emergency Team (MET)や100,000lives campaignなどに呼応されるように世界各国で導入が進んでいる。しかし効果を示せない研究も存在する。予期しない院内死亡を予防しうる手段として、当院におけるRRSの活用方法を検討することは有意義であると考え

【目的】心肺停止(Cardio Pulmonary Arrest; CPA)コード症例においてR. Bellomoらが行ったMET基準への該当の有無を検討する

【倫理的配慮】看護倫理委員会の承認を得て行った

【方法】2008年1月から2010年4月までのRRSコールを対象とし、収集内容はCPA件数、心拍再開の有無、RRSコール前のバイタルサイン(心拍数、収縮期血圧、呼吸回数、酸素飽和度、意識レベル、尿量)よりMET基準該当の有無、退院時死亡の有無、退院日時とした

【結果】RRSコール137件中CPA症例は51例(37%)であった。RRSにより蘇生が行われ心拍再開となったものは37例(72%)、RRSコール前MET基準への該当は32例(65%) (2例は情報収集不可)、CPA症例のうち退院時死亡の症例は36例(71%)であった

【考察】W. Ehlenbachらの研究では院内CPA後の生存退院症例は約18%、当院でのRRSコールされたCPA症例は29%であるため概ね良好である。当院においてはCPA症例でのRRSコール前MET基準には65%が該当しており、71%という当院内での予期しない心CPA症例における高い死亡率は、METを導入することにより、予防し得た予期しない死亡であった可能性が示唆される。そのためRapid Response Team (RRT)の努力と共に、重篤な有害事象を予防していく努力も必要である

【まとめ】CPA症例のRRSコールではMET基準に65%が該当していた。またそれらの死亡率は高値であり、予防のためのシステム構築が必要である

P10-84

平成21年度赤十字看護専門学校の学校評価に関する実態報告

日本赤十字社事業局看護部

○池田 由美子、東 智子、浦田 喜久子

【はじめに】平成14年に専修学校設置基準の一部が改正され、看護専門学校には教育活動等に関する「自己評価」を行い、結果を公表することが努力義務化された。平成19年6月には義務化となり、「自己評価」に加えて学校関係者による評価の実施・公表が努力義務となった。日本赤十字社は平成19年3月に「赤十字看護専門学校の評価に関する検討会」で評価指針を作成し、学校評価の実施および結果の公表を推進してきた今回は、平成21年度末時点での取り組み状況を報告する。

【方法】評価体制及び結果の公表に関する記述式、及び選択式質問紙調査 対象：全国赤十字看護専門学校17校 調査期間：平成22年3月~5月末日

【結果・まとめ】評価体制：教職員及び学校運営に直接関わる者による「自己評価」は全校が実施していた。「自己評価」の評価者の構成をみると、全校が全教職員、またはその一部で実施しており、その他、支部関係者や臨地実習病院である設置病院の看護部長などを含めて実施している学校が14校(82%)あった。また、大学教員や保護者による「学校関係者評価」を実施している学校は2校(12%)あった。学校運営会議での討議を経て最終評価を決定している学校は16校(94%)である。結果の公表：公表を実施しているのは5校(29%)に留まった。公表は報告書や設置病院の年報への掲載によって行なわれており、今後、13校(76%)がホームページでの公表や保護者への情報発信を予定している。看護学は実践学であり、基礎教育における臨地実習の意義は大きい。学校評価結果を、臨地実習を行う設置病院等と共通理解し、学校運営の改善や教育水準の保証に向けた連携・協力を促進する必要がある。